

宮本忠夫さんとの出会いと未完のヒロシマ絵本

村上美奈子

一 宮本忠夫さんの2冊の既刊絵本

宮本忠夫さんと最初にお会いしたのは5年前の2018年秋だった。た。

私はその前年から、奥田貞子さんの文に宮本さんが絵を描いた2冊の原爆絵本『ケイコちゃんごめんね』『ルミちゃんの赤いリボン』一つだけとまったらかえってくるといったのに』（いずれもポプラ社、1983年）のことを調べていた^①。奥田さんが長年教師をしていた山形県の上奥にある全寮制のキリスト教の高校を訪れている人々からお話を伺ったのを皮切りに、9月の広島での原文研の際に台風で足止めを食らったついでに、上記『ルミちゃん』の舞台であり、奥田さんの故郷であり、原爆の当時にも暮らしていた大崎下島まで車を走らせ、また、翌月には、奥田さんの原爆についての手記を冊子化したその高校の卒業生の保護者や同窓生を訪ねて新潟で話を伺った。さらに出版社を通じて、絵本が出版されるきっかけとなったテレビ番組のディレクターにもお会いして、「テレビ紙芝居」として放映された映像を見させていただいた。

宮本さんには2018年の夏の初め頃に出版社を通してお手紙を

書いたらお返事をいただき、涼しくなったらギャラリーをしている自宅へどうぞ、ということだったので、秋を待って素敵な作品でいっぱいのご自宅を訪問して長時間にわたってお話を聞かせていただきたい、多様な作品を見せていただいたりした。自宅内にさらに人形劇の小屋を準備中だということで、この空間で宮本さんの人形劇を楽しめたらどんなに素敵なことだろうかとても楽しみになった。

その後、銀座でのグループ展の案内をいただいて見に行ったり、その直後に行った長崎市立図書館の本棚に、タイトルの下のイラストが宮本さんの画風に見えたので手に取って見たらやっぱりそうだった『日本にも戦争があった 七三二部隊 元少年隊員の告白』（篠塚良雄・高柳美知子著、新日本出版社、2004年）を偶然見つけた。近所の図書館にもたくさん所蔵されている宮本さんの絵本を次々と見ながら、その作品世界の幅広さに感銘を受けていた。

今回改めて近所の図書館で宮本さんの作品を検索したら、市内に134件所蔵していた。そのうちの7件は別人の宮本忠夫さんによる翻訳や編集集だと思うが、それ以外の127件は絵本作家であり絵本画家であるこの宮本忠夫さんの作品で、しかも、これ以外

にも作品はまだまだあるので、本当にたくさんの絵本や児童文学等の絵を描かれたことに驚きを新たにした。

ところで、奥田さんの体験が絵本になるに当たって、最初は他の絵本作家から絵本化したいという希望があったが奥田さんがお断りしたということ、山形で奥田さんの勤務校を訪問した時に伺った。その絵本作家の具体的な名前も教えてもらったが、その作家は戦争と平和についての絵本を出してはいるものの、奥田さんのトーンとは異なると納得がいく。奥田さんは宮本さんの『えんとつにのぼったふうちゃん』（ポプラ社、1978年）の絵を見て気に入ったということである。その絵本の絵のトーンも、宮本さんが文を書いたその内容も、子どもがもつ世界の豊かさ、寂しさとファンタジーによる救い、子どもがもつ希望が宮本さんらしく存分に描かれている。

二 宮本忠夫さんの世界

初めに宮本さんにお手紙を出してお返事をいただいた際に、宮本さんは新宿にある「ブーク人形劇場」の人形も作っているということとを教えてくださいました。「ブーク人形劇場」の宮本さんの作品に興味をもちながらもなかなかタイミシングが合わず、観劇が実現できたのは、東京で予定よりも1年遅れのオリンピックが開催されていた2021年の夏だった。ワニのお話だった。このところ人気の絵本作家ヨシタケシンスケの「りんごかもしれない」と2本立てで、ヨシタケ氏のトークが行われる日に予約をして見に行った。大入り満員で、チケットは早いタイミングで売り切れてしまっていたようだった。

また、自宅に伺った際に、震災の絵本を作成中ということで見せていただいたが、内容の重さもあって、なかなか出版に至らないということだった。作成途中の絵本を作家の方から見せていただいたのは初めてだったので、絵本はこのような段階を踏んでできていくのか、ととても感激したと同時に、いつ頃、どのような形に完成して出版されるのだろうか、ととても期待が高まった。

結局、その絵本は2021年に出版された。私は震災の絵本について調べていて、福島、宮城、岩手の県立図書館や沿岸自治体の公立図書館、震災伝承施設等に置かれている絵本にひたすら出会いに行っていた時だった。福島県立図書館で司書さんに示していただいた最新の震災絵本リストの中に、みやもとただお作の『うみがみえます』（文研出版）があった。このような形で完成して出版が実現したのだと、感慨深かった。

三 未完のヒロシマ絵本

次に宮本さんから連絡をいただいたのは、2021年の7月のことだった。私は前年に引越をして1年経過後の転送願を郵便局に出していなかったので、せつかく私のところに送っていただいていた『うみがみえます』が送り返されてしまって、お電話をいただいた。余談だが、「青い空は」（小森香子 作詞）の作曲をした大西進先生の合唱教室に都合が合う時だけ参加させていただいているのであるが、そのために出かけた駅のホームで電話を受けた。郵便が戻されてしまったことを申し訳なく思っていたら、「実はヒロシマの絵本を作りたいと思っていて…」と話を切り出され、そのことについては改

めて新しい住所にお手紙を送っていたのだ。

宮本さんは、その時、「げんばくのえほんをかんがえて」いて、「としょかんにいきしらべたりしたのですが、せんぜんの まちのくらしまつり」「どものあそびあきないはものうりは(さかなトウフ)そのようなことをしりたくしらべましたが、なかなかわかりません」そのことがこんどのえほんをつくるのにだいじなことなのです」というお手紙をくださった。

「略(こどものそのひのあさのせいかつ あそびをえがき そのこたちのやくそく、ずーっとさきのえんそくなにげないことが パッとまつしろになってしまふ あくまでたのしくおもしろいあさはやくからそのときまでをしぜんにせいかくにかきたいとおもいます」という宣言に続き、「このようなことはどこでわかるでしょうか なにかわかりましたらおしえていただきたいです」という内容のお手紙だった。

私は2016年に職場のちよつとしたきつかけで原爆絵本の研究成果をまとめ始めて、原爆絵本を見つけ得る限りリストアップした。そうやって1年ほど研究をしていると、最近出版されたばかりの原爆絵本の情報が入ってくるようになって、出版から間もないスピードでキヤッチできるようになっていった。さらに数年間研究を続けているうちに、どういう人がいつ頃出版する予定で原爆絵本を制作途中でらしい、という情報も入ってくるようになった。そうこうするうちに、研究でお世話になった絵本作家さんからこのようにして原爆絵本を作るに当たつての相談もいたただけたということになる。国民学校時代に終戦を迎えた私の親は、経験もない世代の人にそんな相談をしてくるなんて、と呆れていたが、私としてはこれまで研究

してきたことや私もこれから調べようと思っていたことを、素晴らしい絵本作家さんが自らの作品として表現されようとしていて、そこにどれだけお役に立てるかとは分らないけれども、相談をしていただけたことをとてもありがたかった。

私は早速、指田和さんの写真絵本『ヒロシマ消えたかぞく』(ポプラ社、2019年)を紹介したり、東京大学の庭田杏樹さんたちによる当時の写真のカラー化のことが思い浮かんだりして、そのことをハガキでお伝えした。また、8月の広島で、平和記念資料館等に行つて調べてみようと思つていたら、コロナ禍ゆえに8月7日から資料館等が閉まつてしまい、それでも歩き回つていた平和公園で、前年にオープンしたばかりのレストハウス3階展示室に「被爆前の中島地区のにぎわい」というコーナーがあるらしいということが分かり、秋にでも来てみます、ということをお宮本さんに次のハガキで伝えた。ハガキに細かい字でぎゅうぎゅうにいろんなことを書いてしまったので、宮本さんとしては読みづらかつたらしく、お礼のハガキにそのことも書いてあつて、気を付けなといけなと反省した。

その年の10月に「旧日本銀行広島支店」で戦争や平和に関する児童文学のイベントがあり、『絵で読む広島島の原爆』(福音館書店、1995年)の絵を描かれた西村繁男さんのトークもあり、本当なら文を担当した那須正幹さんが話をされる予定だったのが、残念ながらその年の7月に亡くなられたので、西村さんが話をされ、それでも、西村さんの立場から那須さんとの共同作業でその絵本が作られていたお話を伺うことができてとても中身の濃いイベントだった。そのイベントの合間にレストハウスにも駆け込み、宮本さんに是非知つていただきたい中島地区の当時の様子が分かつたり、そこで購

入できる『証言』そこに子どもたちの遊んだ町があった。中島本町・材木町・中島新町・大手町』（ヒロシマ・ワールドワーク実行委員会、2019年）の内容や付録の地図を見つけたりして、子どもたちの生き生きとした姿がとても見事だったので、そのことをまた宮本さんにハガキで知らせた。

宮本さんからは紹介した本を両方とも購入したというハガキをいただき、そこには、「せんじつまごがまましておいかけっこ」かくれんぼすらしたことなく、もっぱらゲーム・チョットこまりましたいまのこともどしたらかんじてもらえるのか、ヨワツタ・カンガエちゅう」ということも書かれていた。

そして、その翌年2022年7月に、私が岩手を1週間ほど放浪していた間に、宮本さんはいったん出来上がった絵本（ご本人や編集の方は「ラフ」と言われるが、私から見るとすでに立派な絵本）を私のところに送ってくださっていたようで、岩手から帰ってきた時には受け取り期限を過ぎていて受け取れず、中身が何だったかも分からないままお詫びの電話をかけた。私が受け取れなかったので、先に出版社の編集の方に見ていただくことにした、ということだった。出版社に見せるよりも先に私に見せようとしてくださっていたことに驚くと共に、改めて受け取れなかったことを残念で申し訳なく思うた。

宮本さんからは、編集の方に見ていただいた結果、「まだわたくしのおもいがつたわりづらく、つめがあまりいことがジャンとわかりましてやりなおしています」というおハガキをいただいた。

その前後も合わせて、『うみがみえます』のように宮本さんのヒロシマの絵本が出版されることを心待ちにすると同時に、私も研究

していく中で当時のことが具体的に分かってくると、宮本さんに追加の資料を送ったり、また、送ろうとして資料をピックアップしたりすることを続けていた。

今年に入ってから、指田さんの写真絵本の続編である『ヒロシマ消えたかぞく』のあしあと』（ポプラ社、2022年）に登場する奥本博さんと2022年8月6日の第一泉女の慰霊祭の時間にお会いできたのをきっかけに奥本さんの弟たちや妹たちのことを追悼平和祈念館等で調べていて、奥本さんが今でいう「本通（ほんどおり）」（当時は革屋町）近辺の当時のことを今なお生き生きと記憶されていて語られていることを知り、その資料も宮本さんにお送りしようと思つていたところだった。

そんなことをしながら、今年も8月6日に広島に行き、9日に長崎に行つて、下旬にはアフリカのセネガルに行つて9月に帰国したら、宮本さんのおつれあいの寿恵子さんから、訃報を伝えるお葉書を送っていただいた。8月9日だったという。ヒロシマの絵本を完成できなかつたことを残念がつていたという。

秋になってから改めて寿恵子さんに連絡をしてご自宅のギャラリーへ伺い、ヒロシマの絵本を見せていただいた。『またあとで』というタイトルで、宮本さんらしい青いトーンで描かれたものと、話の展開も構図も大きく変えることなく、しかし、『みずいろのセミ』というタイトルに変わり、豊かな色彩になった、しかしやはり宮本さんらしいタッチで描き直された両方を見せていただいた。なぜ「みずいろ」なんだろう、「そらいろ」ではなく「みずいろ」というところに意味はあるのかな、と、絵本を見た後、考えている。

その絵本に描かれている題材も内容も絵の雰囲気もすべて、宮本

さんが表現しようとしていた宮本さんらしい世界として伝わってきた。そして、調べられていた方言や具体的な地名、当時の雰囲気や考え方、子どもたちの遊びやなりたいたいのもの、将来の夢、子どもだけでなくてみんなの希望とも言えるものも描かれていた。朝鮮出身の職人さんの頁もとても印象的で、絵本の中にこのような形で登場している原爆絵本は他にはないように思う。

ご本人としては、これで完成という形ではないということだけれども、私から見ると、もう二通りも出来上がっているこの絵本を多くの人に見てもらおう機会ができないものかと思う。

出版事情の厳しさが言われる中で、児童文学や絵本の分野においては、それはなおのこと厳しいと聞く。すでに実績のある作家の新しい絵本についても、そのようなものがちゃんと売れるというデータの根拠がないと出版に至らないような状況になっているという。今までにないようなものだからこそ出版にチャレンジする価値があると言えそうなのに、実際の経済の動きに立脚するとそのような発想はできづらくなっているようである。

宮本さんが人形作りをしていた「ブーク人形劇場」の新聞「みんなとブーク」第285号（2023年10月1日発行）には、宮本さんを「画伯」と呼んで慕っていたブーク劇団の小柳田美子さんが「悼む 絵本作家 宮本忠夫」という記事を寄せている。「画伯の作風は気ままにして奔放、愛情に溢れ、悪戯つぼく、おおらかさの中に含羞が漂っていた。」宮本さんの作品の価値を本当に理解し、共に作品を作られてきたからこそ短く全てが込められた表現。私は宮本さんの作品について、かするほどにしか知らないが、未完とは言え描かれたヒロシマの絵本を何とかみんなで繰り返し読んで眺め

ていけるようにならないかなあ、と夢を抱き続ける。

宮本さんとの決して多くはない交流の中で2回もすれ違ってしまったが、寿恵子さんに絵本を見せていただいた翌日、元々予定していた岩手の大船渡と陸前高田の訪問で、高田の一本松の近くにある「東日本大震災津波伝承館」を地元の子どもたちと一緒に見学する用事があった。寿恵子さんのお話しの中で、宮本さんの娘さんがその伝承館で解説員の仕事をすることが分かった。絵本を見た翌日、その受付にいた娘さんにお会いできた。しかもその日は娘さんのお誕生日。後で考えると、知らず知らずのうちに宮本さんからお遣いを頼まれたような気持ちになった。今度は2月に大船渡と陸前高田に来る時に、それぞれの市立図書館に行つて、宮本忠夫さんの作品を見てみようと思った。宮本さんの多様な作品、そして、広島の絵本、それらは絶版になっているものも多いが、図書館には多く所蔵されている。手に取つて、何度も読み直して、宮本さんの作品世界をこれからも訪問し続ける。

注

1 拙稿「伝え教え、そして受け止める営みとしての教育——被爆した子どもに応答した大人として、そして、原爆を語り伝えた教師としての奥田貞子——」立正大学社会福祉学部紀要『人間の福祉』第3号、17―31ページ、2019年。但し、宮本さんにお会いしたのは入稿後だったので、宮本さんにお会いした際の記述はない。